

## 委員会報告



# 精神保健福祉委員会活動報告 (2001〔平成13〕年度～2005〔平成17〕年度)

## 精神保健福祉委員会

### 1. はじめに

この報告は、2001(平成13)年度から2004(平成16)年度までの地域精神保健福祉委員会の活動と、それに引き続く2005(平成17)年度の精神保健福祉委員会の活動をまとめたものである。

### 2. 地域精神保健福祉委員会の成り立ち(2001〔平成13〕年度)

委員会設立時の2001年度は、9月からの開催と、年度途中からの委員会活動であったこともあり、とりあえず東京近郊の7名の委員を招集して2カ月に1回のペースで委員会を開催し、「地域のPSWのあり方」などについて話し合うとともに、2002(平成14)年度の活動内容について検討していくこととした。

当時、社会的入院の解消の方向性とともますます地域精神保健福祉の重要性は高まっていくことは必然であり、そのなかで精神保健福祉士の役割や活動の可能性について明らかにしていくことが委員会の方向性として重要であると考えられた。特に、「病院から地域へ」という流れだけでなく、「病院も地域の社会資源の1つとして」考えていけるように、というパラダイムにて活動を行いたいと考えた。

「地域」と名前のついた委員会がはじめてだったこともあり、年齢的に若い委員やまだ精神保健福祉士の国家資格を取得していない者も委員として召集し、共にブレインストーミングを行った。おもなテーマは「地域の定義は何だろうか?」「委員会の取り組むべき課題は?」などで、白熱した議論の結果、活動のテーマを「市町村における精神保健福祉の取組み」に絞るということと、「“病院vs地域”という対立概念ではなく、病院も地域の1つの資源であるというように、パラダイムの転換を発信していこう」ということが決定された。

### 3. 市町村調査(2002〔平成14〕年度)および仙台大会発表(2003〔平成15〕年度)

2002年度には、地方に所属する委員を入れて委員を

増員し、14名の委員でやはり2カ月に1回のペースで委員会を開催して話し合いを行った。地域生活支援センターの職員のほか、クリニック、学校、行政に勤務している者も委員となっていた。

1999(平成11)年度の精神保健福祉法改正により、2002年度に精神保健福祉業務が市町村に移管されたこともあり、実際に市町村における精神保健福祉業務の進展状況の実態を探ることをこの年の委員会の活動の骨子とした。そのため、全国各地から6カ所を選定して訪問調査に赴くことになった。

調査の質問項目としては、障害者プランの策定状況、居宅生活支援事業の推進状況、地域での精神障害者福祉活動の経緯、2002年度からの市町村での精神保健の取組み(PSWの配置状況や地域の精神保健福祉従事者数なども含む)などのほか、市町村で独自に取り組んでいること、今後の課題、ケアマネジメントの取り組み状況などを調査した。そのほか、基本データ(資料参照)として、人口、地域背景、病院数・病床数など医療状況、社会復帰施設・家族会などの社会資源状況、手帳取得件数・ホームヘルプ利用件数などの福祉サービス状況、精神保健福祉関係予算などについても事前にアンケート用紙を送って調査した。

実際の調査地は以下の6カ所である。

- |     |            |                     |
|-----|------------|---------------------|
| ①東京 | 10月25日     | 練馬つくりっこの家 など        |
| ②鳥根 | 10月18日     | 地域生活支援センターエスティーム など |
| ③埼玉 | 11月8日      | 東松山市障害福祉課 など        |
| ④沖縄 | 11月13日～15日 | ふれあいセンター など         |
| ⑤滋賀 | 12月12日・13日 | 滋賀県社会福祉事業団 など       |
| ⑥大阪 | 12月12日・13日 | 矢田障害者福祉会館 など        |

その結果、地域によって市町村の取組みがかなり違うということがはっきりしてきた。居宅3事業についても、民間丸投げの市町村もあるなど、市町村によっ

て精神保健福祉業務に大きな開きができるであろうことが予想された。また、当時から計画されつつある市町村合併と大いに関連してくるだろうということも予想された。

これらの結果を、2003年5月の第39回日本精神保健福祉士協会全国大会(仙台大会)・自主企画にて発表することとした。

当初の予定では、各地域へ赴いた調査内容をもとに事例として発表する予定であったが、個々の地域の事情も絡み、市町村の取り組み方について調査結果に基づいて3類型、さらに2類型を加えて5つの類型化を行った。

実際の5類型は以下のとおりである。

\*第1類型：団体がすでにあつて活発な活動をしていて市町村が追随するタイプ

このタイプでは、実績をもつ法人がすでに地域で活発に活動しており、人口に対しての施設の充実度が高いのが特徴である。また、活動が複数の市町村にまたがっていることも多い。

\*第2類型：県もしくは市町村が先に施策を決めて、施設づくりを行うタイプ

このタイプでは、行政がトップダウンで施策を決定している。たとえば3障害合同の施策を立てたり、高い予算措置を行ったりしている。そして、その施策に基づき施設が建設されていくのだが、計画性が高いため、バランスよく建築されていくという特徴がある。また、このタイプでは、行政主体でサービス調整会議があるのも特徴である。

\*第3類型：市町村にイニシアチブがなく、法人に委託しているタイプ

このタイプでは、地域ですでに活動している精神保健福祉関連の任意団体よりも、高齢者・他障害者団体を中心として活動していた社会福祉法人などの法人に、地域生活支援センターや精神障害者ホームヘルプ事業が委託されるとともにケアマネジメント業務も委託されている。そして、市町村主体の活動は実施されていないというのが実情である。

\*第4類型：複数の団体が存在して連携を取っているタイプ

このタイプは、地域内に精神保健福祉団体が複数存在し、お互いに突出した団体がいないため、逆に団体間の連携がとれている。この場合、民間団体が連絡会などをつくって市町村と話し合いを進めていくことが可能である。

\*第5類型：まだ取り組みがなされていないタイプ

このタイプは、残念ながら市町村においての取り組みが進んでいないタイプで、調査時点ではこのような市町村もまだ数多くあると予想された。

これらの発表とともに強調されたのは、地域におけるPSWがしっかりと「PSWとしての視点」をもつことが必要ではないか、という示唆であった。特に、地域特性を含めていろいろな項目すべてを包括的にみて全体をとらえる視点や、市町村という枠組みを超えて当事者の実際の生活を考えた「生活圏域」という視点が重要であるということも発表した。

これらの発表をもとに、自主企画の参加者を7グループに分けて自分たちの地域についても考えてもらうディスカッションを行った。

しかしながら参加者は、はっきり類型化することに対してはあまり積極的ではなく「自分たちの地域はどの類型にも当てはまらない」などの意見が多かった。委員の印象では、「自分たちの施設における仕事が忙しく、なかなか地域における資源の現状を把握することがむずかしく、よって類型化については意見がいない」というものが多かった。

大会直後の反省では、調査対象が市町村によってPSWだったり行政職員だったりまちまちであったこと、今後は反省点をふまえてよりよい調査方法を検討していくこと、あちこちの地域にこの結果を持ち込んで、共に話し合いながら市町村における精神保健福祉のあり方について検討を重ねていく方針が確認された。

大会時に実施されたアンケートでは、実際の訪問調査を希望する地域もあり調査候補地の絞込みとともに、調査方法も精査していくということになっていた。

しかし、ここで当委員会は、大きな方針変更を迫られることとなった。

#### 4. 方針変更—「地域におけるPSWの視点」の追究(2003〔平成15〕・2004〔平成16〕年度)

大会発表後も、2003年度は前年に引き続いて委員会の開催は約2カ月に1回のペースで行っていた。

当初は、前項で示したように前年度に引き続いて全国6カ所程度の市町村の地域精神保健福祉の進展状況などを訪問調査する予定であったが、8月の委員会の際に常任理事会より、たくさん調査をすることが第一義ではなく、「地域におけるPSWの視点」についてもっと委員会内部で協議してコンセンサスを得るように、との指摘があった。そのため、以後は「地域におけるPSWの視点」について議論を深め、これをホームページ

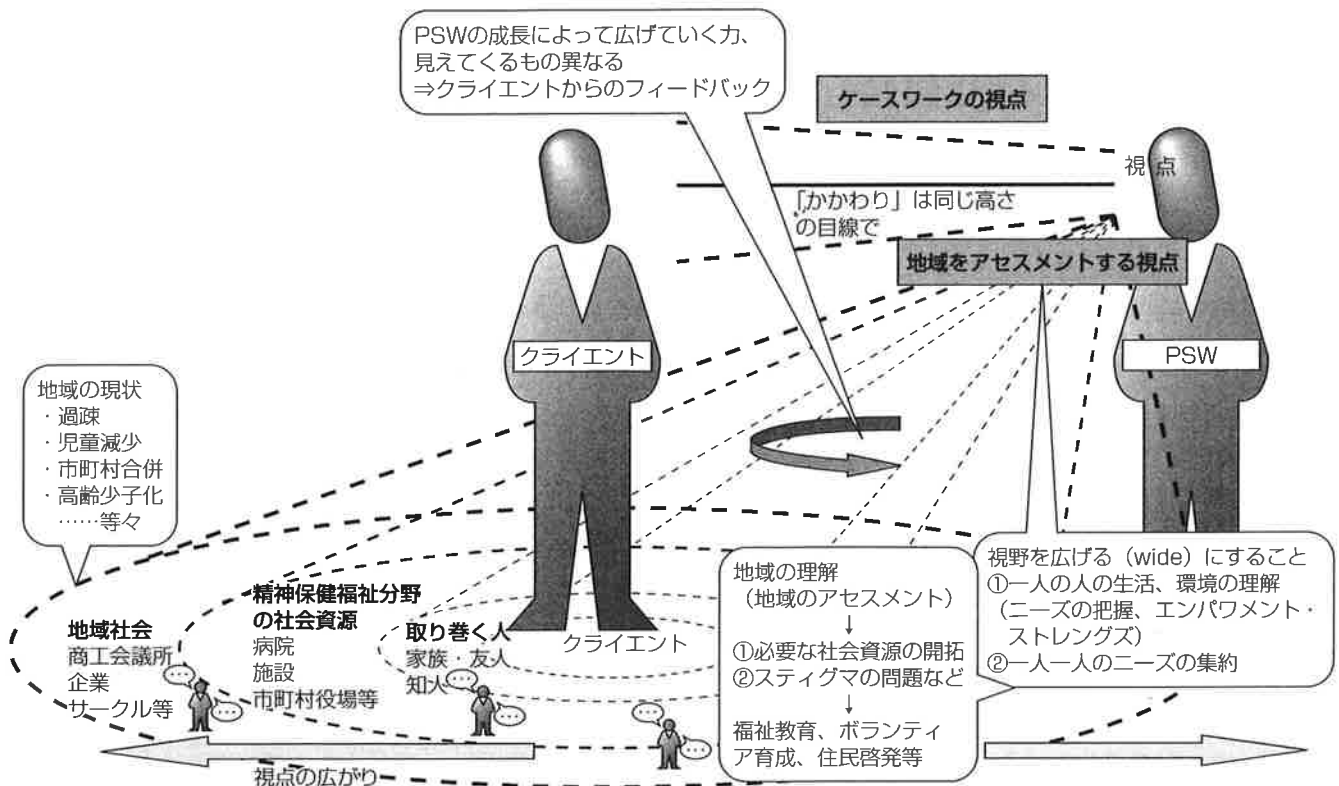


図1 クライアントとのかかわりを通して広がる視点 (2004年 地域精神保健福祉委員会)

〈クライアントとのかかわりを通して広がる視点〉

上記の図は、PSWがクライアントと同じ目線に立ちながら、クライアントの周りに広がる資源や地域を見据えていくという視点が重要であるということを表している。PSWは1人のクライアントにかかわりながら、時間的経過や、信頼関係の深まり、表出するニーズの受け取り、クライアントの生活圏域、地域の社会資源の質や量などの要因から視点が広がっていく。

【人】：左の人は所属機関等を通してかかわりをもつクライアント、右はPSW。

【円】：クライアントの立っている足元から広がる円は、クライアントを取り巻く人、精神保健福祉分野における社会資源、地域社会にある社会資源をイメージしている。

【点線】：PSWから横に伸びる点線はクライアントとかかわるケースワークの視点を現わし、クライアントを生活者としてとらえ同じ目線に立ち、かかわっている。

また、PSWから下方向に伸びる点線は地域をアセスメントする視点の広がりを示し、PSWがクライアントとかかわることによってできる信頼関係の深さやかかわりが大きくなるにつれ、クライアントを取り巻く状況が幅広く見えている。

ジヤ大会発表、委員会報告書の形で会員に還元していき、この方向性に修正した。

当初は、a) 作業所や病院などに所属しながらも所属機関を越えた地域のPSWとしての視点をもてるか、b) 地域における資源の増減などの時系的变化をみつめる視点が重要、c) 一般社会との境界線に立ち、精神保健福祉分野の内側外側をみていき、つないでいくという視点が重要。との意見が出されたが、わかりやすくしていくために「PSWの視点」を図で表示しようということになった。

実際に、図示しようとする1枚の図だけで表現することは不可能で、複数の図を組み合わせることを検討した。委員が話し合いを深化させ、前年度調査結果や自らの地域実践について語り合ううちに、所属機関に求められてきた以上に広い視野と多様な技術を意識的に用いて働くことが求められているのではない

か、という結論に至った。そこで「地域が変わるとき、施設が変わるとき、視点が変わるとき：PSWの視点を拡大する」というテーマを設定して、2004年度の第40回日本精神保健福祉士協会全国大会（富山大会）で発表しようということを目指した。

話し合いの末に、得られたコンセンサスは次のとおりである。

- 1) PSWの視野を拡大するためには、視点の変化が必要である。
- 2) 利用者とかかわりのなかで、PSWの成長と視野は螺旋状に発展していく。利用者の成長も同様に螺旋状で発展する。
- 3) PSWは所属機関に足場をもつが、同時に地域を活動の基盤として足場を拡大していく。それと同時に所属機関のみではなく、地域の資源が活動の際の資源となる。

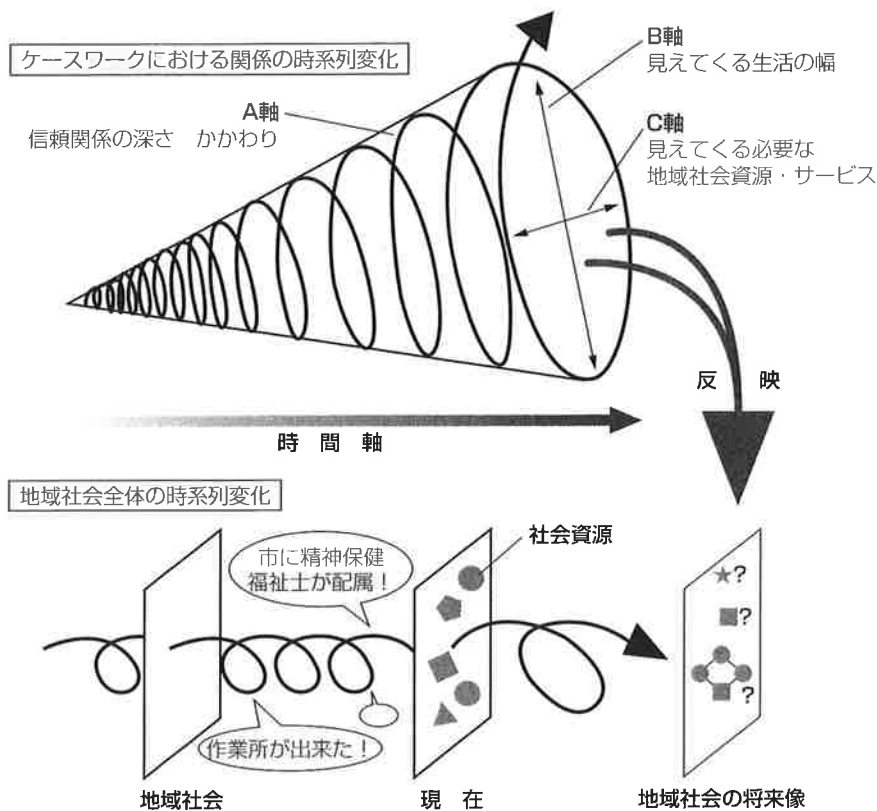


図2 時系列変化を加味したPSWの視点(2004年 地域精神保健福祉委員会)

ケースワークにおける関係の時系列変化

- 【A軸】：クライアントとPSWの継続的なかかわり。表出されるニーズに対して両者は課題を共有、解決に向けた協同の取り組みが行われる。この一連の経過のなかで信頼関係は徐々に深まりをみせる。
- 【B軸】：A軸が進行するに連れ、クライアントの生活におけるさまざまな側面が明らかとなる。PSWはクライアントの生活を幅広く見渡し、全体的な把握が可能となる。
- 【C軸】：B軸の拡大により、個々に必要とされる社会資源やサービスが明らかとなる。それに伴いPSWも地域を幅広く見渡す必要性が生じ、地域全体で求められる社会資源も明らかとなる。

地域社会全体の時系列変化

それぞれの地域にはその地域に固有の歴史がある。精神保健福祉に関する社会資源も次第に増えたりして変化していく。PSWは、地域における資源の増減を過去から現在、現在から未来へと続く流れの中でとらえていくという視点をもたねばならない。

反映

各クライアントとの関係から、今後必要とされる社会資源・サービスを考え、それらを反映させた地域社会の将来像を描いていくことが、特に地域のPSWには必要である。

4) 視野の拡大や成長、活動基盤と利用資源の拡大とともに、PSWはこれらの活動の場や用いるスキルをさらに拡大し、時には鳥瞰的な視野をもつことが求められる。また、PSWとしての経験の蓄積に伴って、用いるスキルも、個別の援助技術もしくは集団や地域の組織化だけでなく、機関の管理運営、地域や行政機関との連携、ひいては価値を置くべき理念の伝達、権利擁護、そして、地域計画や政策立案への参画にまで拡大していく。

これらの議論をふまえて、委員会では、1)から4)の概念図を作成するとともに、大会発表前にホーム

ページに掲載し、大会での委員会企画に参加する人びとに対して、概念図に対するフィードバックを呼びかけた。概念図作成の意図は、大会で、上記に掲げたテーマの議論を促進するためであり、図の作成のみが目的ではないことも確認した。

作成した図は次の通りである。

①クライアントとのかかわりを通して広がる視点(図1)

PSWはクライアントと同じ目線に立ちながらクライアントのまわに広がる資源や地域を見据えていくという視点が必要であるということを表している。

②ケースワーク、地域社会全体ともに時系列変化を考

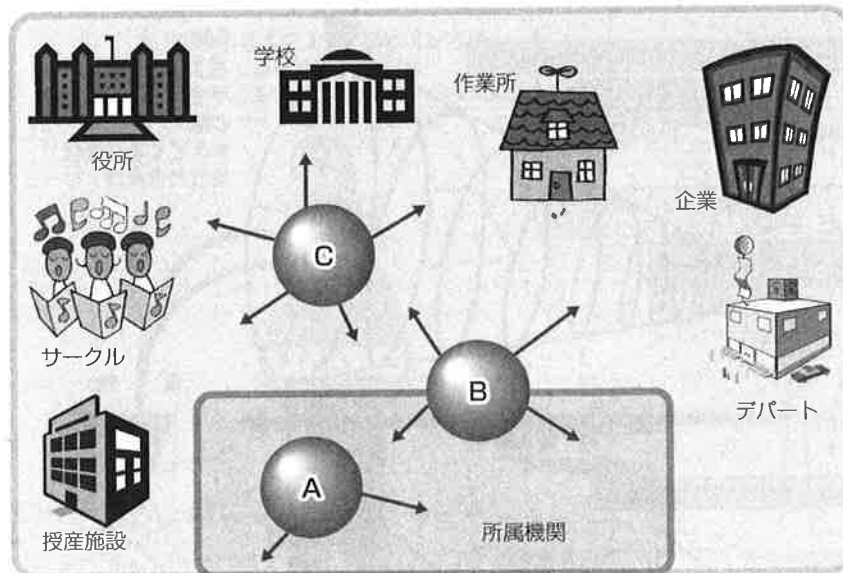


図3 PSWのスタンスからみた視点の比較(2004年 地域精神保健福祉委員会)

①のスタンスは所属機関内の資源やクライアントへ向けた視点のみの状態

所属機関(病院・各種施設・関連グループ)内における目の前の業務に集中している場合、この状態となる。当然、すべてのPSWは多少の差はあっても、業務をこのスタンスでこなすことになる。しかし、このスタンスに終始しては、地域をとらえることはできない。視野の狭窄が起きやすく、利用者の社会参加が制限されたり、PSWの活動も限定的になりやすい。

②のスタンスは所属機関内だけでなく、外部の資源にも視点が向けられている状態

所属機関から地域に一步踏みだし、地域の資源をある程度見渡せる位置にスタンスをとっている。利用者のニーズを通して、地域の資源とつながったり、地域の各種委員会、会議等でつながりをもつケースが多い。このスタンスでは、所属機関(およびその利用者)の利益と地域の利益のすり合わせを行う。そこにはPSWとしての倫理観と所属機関のニーズとの葛藤が起きやすい(たとえば、利用者にとっては他所の施設を利用したほうが望ましいが、所属機関のニーズから自施設を利用してもらうなど)。

③のスタンスは所属機関にとらわれず、外部の資源を広範囲にとらえ、地域を見渡している状態

所属機関の利益を超え、地域の社会資源の現状をふまえたうえで地域の将来像を描くことができる。所属機関さえも、客観視することが求められる。ケアマネジャーや公的機関のPSWに特に求められるスタンス。ほとんどのPSWはどこかの機関に雇用されているため、このスタンスに常に身をおくことは非常にむずかしい。

当委員会では、「地域のPSWとしての視点」には、所属機関にかかわらず、③のスタンスで地域をアセスメントできる柔軟さをもつことが含まれていると考えた。

#### える視点(図2)

クライアントの理解は継続的なかわりによって時間とともに次第に深まっていく。一方、クライアントやPSWの所属する地域自体も時系列に伴い資源が増えたりして変化している。PSWは各クライアントとのかかわりのなかから、今後必要とされる社会資源やサービスを考え、地域社会の将来像に反映させていく視点をもつ必要がある。

#### ③PSWのスタンスからみた視点の比較(特に所属機関との位置関係)(図3)

PSWは自らのスタンスを所属機関との位置関係において振り返るのが望ましいと考えられる。PSWは所属機関に足場をもつわけであるが、所属機関のみではなく、地域の資源を広くとらえていく視点が必要である。

#### ④コミュニティワーク実践におけるPSWの視野(図4)

視野の拡大や成長、活動基盤と利用資源の拡大とともに、PSWは、これらの活動の場や用いるスキルをさらに拡大し、時には鳥瞰的な視野をもつことが求められる。

大会では、92名が参加し、9グループに分かれて議論が進められた。アンケートに答えた72名の所属は、社会復帰施設が37名、精神病院またはクリニック11名、教育職11名、保健所・市町村等5名、その他6名、不明が2名であった。経験年数は、経験ゼロ(学生等)7名、3年未満13名、3年以上5年未満13名、5年以上10年未満9名、10年以上20年未満14名、20年以上12名、不明が4名であった。

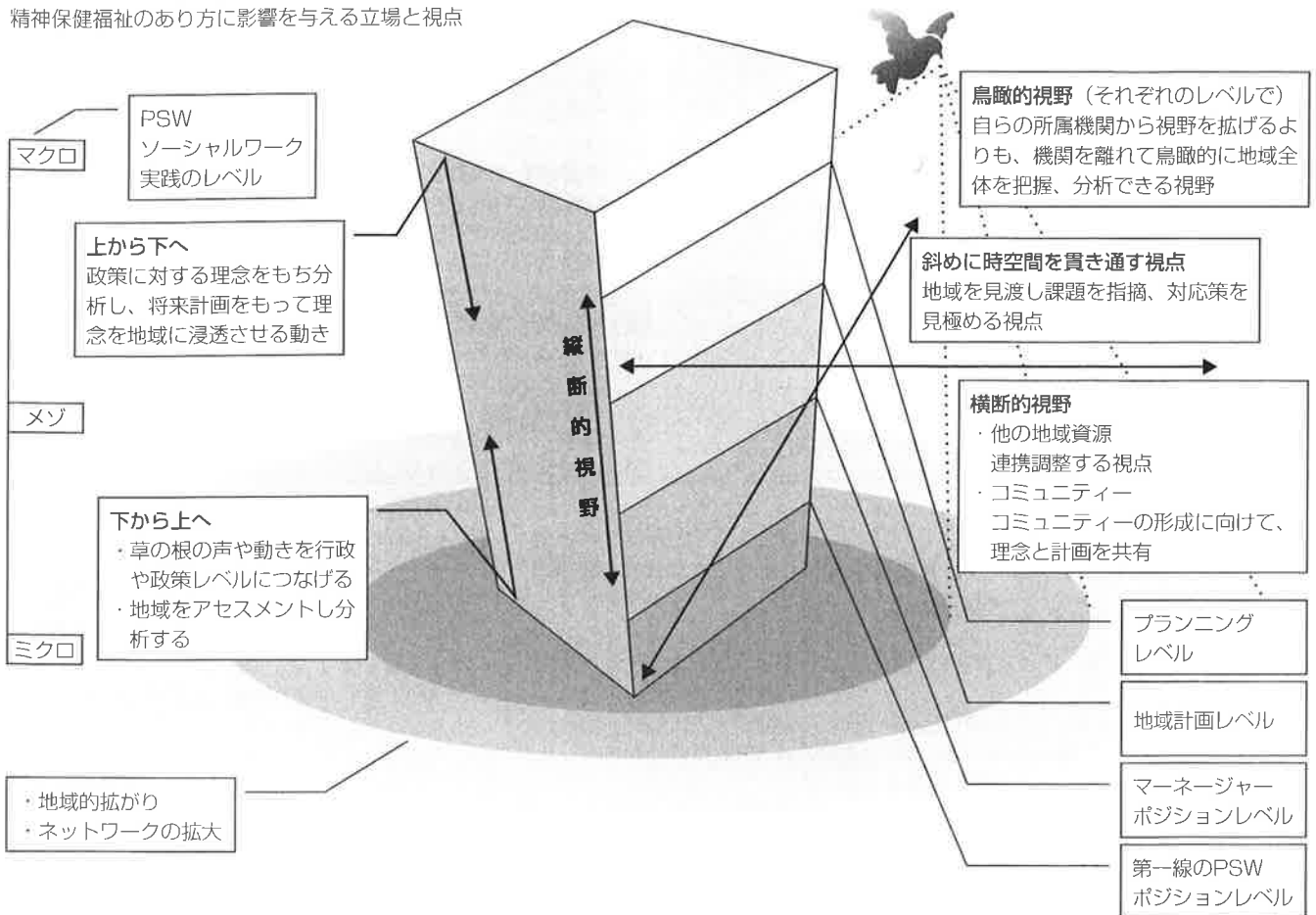


図4 コミュニティワークによる視点

会場では、参加者の本企画への参加の動機をはじめ、PSWの視野の拡大、求められる多様な技術と地域で働く今後の課題などが議論された。ホームページ掲載の図を確認して参加した人は半数以下だったが、会場では図があったために話しやすかったという感想が聞かれた。最も多くの関心を集めたのは図3であった。

同じ題材を用いながらもそれぞれのグループでは話の方向性が異なり、所属機関での役割とPSW本来の役割の葛藤、困難事例の地域での支え方、若手職員の教育に至るまで、さまざまな話題が議論された。また、掲げたテーマのもとでの議論を経て、所属機関の利益を超えて組織や地域を具体的に変えるにはどうしたらよいか、との話し合いになったグループもあった。

一方、委員会の企画の目的の1つでもあったが、PSWとしての視点を広げるための刺激としようという試みについては、ある程度達成されたということが参加者のアンケートからも読み取れた。実際に視点が変わったとする参加者は回答者72名中60名と8割を超え、また自らの地域の課題についても、ネットワークや啓発の必要性など多くの観点が喚起されたようである。語り合いについての満足度も「満足」「やや満足」

をあわせて61名と8割を超えた。

アンケートの自由記述では、「視点の確認・再確認」「客観視」「PSWは社会資源」「視点が狭い」「変化」などをキーワードとする回答があった。自分の活動している地域の課題では、「ネットワーク・連携」「3障害」「社会資源不足」「財政」「地域福祉計画」「普及・啓発」「市町村合併」などをキーワードとする回答があった。

この企画により、「PSWとしての視点」についてはある程度話し合える土壌づくりに成功したと思われる。しかしながら、PSWとしての視点が広がったとしても、各地域において実際に地域精神保健福祉を推進するにあたってはまだ課題は山積している。そこで、①「視点」についてホームページ上やメーリングリストで検討を継続する、②研修委員会や出版委員会と連携しながら「視点拡大」について多くの人に考えてもらう、③視点について自己チェックできるような簡便なツールを開発する、などの方法を通して、地域を変革していくための実践的な戦略を検討していくことを次の目標とした。

表1 富山大会アンケートからのスケール項目抽出カテゴリー

<b>I 視点グループ (キーワード54)</b>		
①視点の広がり・ちがひ・変化グループ	⑦地域間格差の調整	
②所属機関を超えた視点	⑧PSW同士の連携	
③自己を振り返り、再確認する視点	⑨ボランティアへのコーディネートと連携	
④自分の機関を客観的に見る視点	⑩ネットワーク	
⑤スタンス・モチベーションの保持	⑪施設間・領域間の連携	
⑥視点の言語化	⑫風通しのよい連携	
⑦精神分野を超えた視点	⑬他の機関へのアクセス	
<b>II 地域・連携・ネットワークグループ (キーワード35)</b>		
①自分が地域を知っているか	⑭困り込みにならない	
②地域に自分の機関を知ってもらっているか	⑮活動を点から線に	
③地域住民とともに	<b>III 社会資源 (キーワード38)</b>	
④地域としての方向性	①PSWは社会資源の1つである	
⑤地域における役割	②関係機関・地域資源の開発と充実	
⑥他地域の活動	③利用者主体	
	④ニーズを見つけだす力・感覚・感性	
	<b>IV その他 (キーワード4)</b>	

表2 「PSWの視点スケール (プレテスト vol.1)」チェックリスト36項目

1 クライアントとのかかわりで視点が広がった	14 業務について「なぜこれをやる必要があるのか」という問い直しをしている	26 自分を客観的に見ることができる
2 精神障害の分野を超えた (とは別の) 視点をもっている	15 クライアントとのかかわりの振り返りをしている	27 PSWはクライアントに利用してもらう立場と認識している
3 所属機関の立場での視点にとらわれている	16 自分の働いている地域の特色を知っている	28 地域に自分の所属機関を知ってもらう必要性を意識している
4 地域のかかえる次の課題を意識している	17 自分は所属機関の中からのみ地域を見ている	29 所属機関が地域住民と交流する必要性を意識している
5 他の地域のPSWの活動から刺激を得るようにしている	18 所属機関によって視点が違うことを知っている	30 活動を点から線へ、線から面へと拡充していく視点をもっている
6 経験により視点の広がりがあった	19 ネットワークを広げていく視点をもっている	31モチベーションを維持することに目を向けている
7 自分のもっている視点を理解し振り返りをしている	20 PSWとしての感覚・感性を磨こうとしている	32 クライアントのニーズを中心とし、サービスや社会資源を考えている
8 クライアントを病者としてではなく生活者としてみている	21 PSWとしての問題意識をもっている	33 既存の社会資源につながない人を「意識している」
9 自分の住んでいる地域の特色を知っている	22 クライアントの希望に応じた支援を行う視点をもっている	34 地域における所属機関の役割を認識している
10 所属機関を超えて視点を自由に動かすことができる	23 PSWは地域の社会資源の1つだという視点をもっている	35 地域の課題をどう克服していくか、具体的にどのように解決していくかという視点をもっている
11 地域に必要な社会資源や制度を創出していく視点をもっている	24 所属する法人等で困り込みにならないように努力している	36 自分なりにPSWの視点の言語化ができて
12 クライアントに資源を提供するためにPSW同士が連携する必要性を意識している	25 既存の機関で連携を強化していく視点をもっている	いる
13 自分の視点は変化してきている		

## 5. 「PSWの視点」自己チェック用のツールの作成 (2005〔平成17〕年度)

このように、委員会内の話し合いの末、PSWにとって必要と思われる視点を4枚の図にまとめ、2004年度の大会発表でグループワークを行い、大変な反響を得たわけであるが、2005年度は、これらの知見を会員に還元するためにも「視点」について自ら考えられるような簡便なツールの作成に着手した。

スケール作成に取りかかる際に、「以前から考えてきた図を軸化する」「レーダーチャートで客観視できるものにする」「単なる施設職員にならないための気づきを得られるもの」「実践しているかどうかと問うのでなく、視点を意識しているかを確認するもの」などが話し合われた。

作成作業にあたっては、委員のみによる意見の狭窄、偏りを防ぐため、そのベースとなる材料として2004年度大会の参加者に実施したアンケート前述のアンケートの自由記述欄を用いることとした。まず、アンケートの感想のなかからPSWの視点に関する言葉(具体的な言葉の一覧は表1)を拾い出して、KJ法に似たカードワークを行い、これをもとに質問項目選定のための予備調査として36項目からなる「PSWの視点スケールプレテスト Vol.1」を作成した(表2)。これを、2005年度の第41回日本精神保健福祉士協会全国大会(広島大会)において、受付時に参加者に配布し、大会中に会場で600部中183部を回収(30.5%)した。

調査結果を元に、SPSSにより因子分析を行った(主因子法:プロマックス回転)。パターン行列でみたところ

表3 「PSWの視点スケールプレテストvol.2」質問項目

次の質問について、まったくあてはまらない場合は1、あまりあてはまらない場合は2、どちらでもない場合は3、ややあてはまる場合は4、あてはまる場合は5を選び、数字を○で囲ってください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	あてはまる
1	1	2	3	4	5
2	1	2	3	4	5
3	1	2	3	4	5
4	1	2	3	4	5
5	1	2	3	4	5
6	1	2	3	4	5
7	1	2	3	4	5
8	1	2	3	4	5
9	1	2	3	4	5
10	1	2	3	4	5
11	1	2	3	4	5
12	1	2	3	4	5
13	1	2	3	4	5
14	1	2	3	4	5
15	1	2	3	4	5
16	1	2	3	4	5
17	1	2	3	4	5
18	1	2	3	4	5
19	1	2	3	4	5
20	1	2	3	4	5
21	1	2	3	4	5
22	1	2	3	4	5
23	1	2	3	4	5
24	1	2	3	4	5
25	1	2	3	4	5
26	1	2	3	4	5
27	1	2	3	4	5
28	1	2	3	4	5
29	1	2	3	4	5
30	1	2	3	4	5

ろ、これらの36項目は5つの因子まで絞り込むことができた（この5項目に絞り込むと36項目が15項目に絞られる）。因子得点の低いものや度数分布に偏りがありすぎるものを削るなどして、質問項目の修正や追加を行った。委員会のなかでは、「視点」と「業務」の区別や、言葉の「定義」はきちんとしたほうがいいのかの意見が出された。

また、調査に対するアンケートから、「PSWの視点スケールプレテストVol.1」を実際に行ってみて、「業務の点検、自分を振り返る機会になった」「ふだんの業務に追われて忘れていたことや、所属機関のせいにして自分もあまり動いてなかったことにも改めて気づくことができました」などの肯定的意見のほか、「質問項目をみていると専門性にこだわりすぎて専門家になりすぎ。クライアントとの距離が広がりほしくないかと心配」などの指摘や、「自分を振り返る機会になったが、視点だけでもっていても実行に移さなければ意味がない」「問題点を把握していても、その問題解決に向けて動き出

さなければいけない」という意見などもみられた。

そして、この結果を受け、2005年度後半には第2次予備調査として「PSWの視点スケールプレテストVol.2」（表3）を行った。プレテストVol.2版は、プレテストVol.1版の結果から得られた5因子をもとに、a自己認識、b実践、c視点の意識化、d連携、e地域アセスメントの軸を設定し、各軸ごとに6つの質問を仮に設定した。軸と質問項目の関係性はあくまでも仮説であるため、スケールの標準化をめざした。また、プレテストVol.1版の感想で用語の定義についての指摘があったため、「地域」「社会資源」「視点」「視野」に関しては表書きに定義を明示した。そのうえで、前回の調査項目から分析に適すると思うものを残し、数項目を加えて30項目とし、回収目標を100部に設定して、2006（平成18）年2月に委員により各自の周囲で調査を行った。最終的には、レーダーチャート様にするなど目で見てもわかりやすいものを作成して、尺度得点を計算していただくところまでのものを作成していく方



表4 「PSWの視点スケールプレテストvol.2」解析により、抽出された因子と残っている質問項目

抽出された因子	項目番号	項目内容	予想していた軸
1	4	所属する機関・施設等でのかかわりが困り込みになる可能性を秘めていることを意識している	地域アセスメント
1	9	地域の課題をどう克服していくか、具体的にどのように解決していくかという視点をもって	地域アセスメント
1	15	所属機関を超えて視点を自由に变化させている	連携
1	21	地域の中での自分の役割を認識している	自己認識
1	28	5年先、10年先の地域社会に必要な社会資源をイメージしている	視点の意識化
1	30	活動を点から線へ、線から面へ拡充していく視点をもって	連携
2	5	クライアントに社会資源を提供するために所属を超えてPSW 同士が連携する必要性を認識している	連携
2	20	所属機関が地域住民と交流する必要性を認識している	連携
2	22	社会資源の存在を知らない人に対してのかかわりを考えている	実践
2	23	クライアントとかかわることで、視野の広がりを感じている	視点の意識化
2	29	満たされないニーズに対して社会資源を創出していく必要性を感じている	地域アセスメント
3	1	自分の働いている地域の特色（文化・住民意識・行政など）を知っている	自己認識
3	6	自分の住んでいる地域の特色（文化・住民意識・行政など）を知っている	自己認識
4	7	クライアントの希望（ニーズ）に応じた支援を行っている	実践
4	8	経験により視野が広がった	視点の意識化
4	12	クライアントのニーズを中心としたサービスや社会資源の提供を考えてかかわっている	実践
4	14	地域における所属機関の役割を認識している	地域アセスメント
5	11	所属機関の立場にとらわれていると感じている	自己認識
5	17	業務について「なぜこれをやる必要があるのか」という問い直しをしている	実践
5	18	自分を客観的に見ることを意識している	視点の意識化
5	25	地域に自分の所属機関を知ってもらう必要性を認識している	連携
6	13	精神保健福祉にとらわれない視点をもつようにしている	視点の意識化
6	24	地域の障害者計画には目を通している	地域アセスメント
6	26	PSWとしての感覚・感性を磨こうとしている	自己認識
6	27	クライアントを一市民としてみている	実践
99	2	自分のものの見方について理解できており、常に振り返りをしている	実践
99	3	自分なりにPSWの視点の言語化ができて	視点の意識化
99	10	他の地域のPSWの活動から刺激を得るようにしている	連携
99	16	自分は所属機関の立場から地域を見ている	自己認識
99	19	法律や施策の動向に注目している	地域アセスメント

向性を考えている。

もっとも、このスケールは、読み手（PSW）が自ら自分の視点について振り返り、チェックするためのものであり、したがって、得点づけすることだけが目的ではない。あくまでも会員の皆様の日常業務にぜひ役立てていただきたいものである。

しかしながら、第2次調査の結果においても、103部の回収データのうち、欠損値のない97のデータで、SPSSによる因子分析（最尤法：プロマックス回転）を行った結果、有効な因子が6因子抽出されたが、第1因子-6項目、第2因子-5項目、第3因子-2項目、第4因子-4項目、第5因子-4項目、第6因子-4項目というように因子項目などにばらつきがみられている。また、30項目のうち6つの因子に入らなかった質問項目が5つあった。このように現時点ではまだまだ信頼性・妥当性ともに高いアンケートとは言い難い。

今後このスケールをさらに精査して使用に耐えるものにしていく必要があるが、これは次期の委員会その他に託したいと思う（現段階での項目は表4）。

## 6. 委員会活動の意義と今後の方向性について

2006年4月から障害者自立支援法が順次施行され、障害者福祉の枠組みが大きく変わろうとしている。精神障害者福祉も他障害分野と統合された施策となり、ますますPSWとしての視点が重要になっていくと考えられる。

今までの委員会の活動としては、①市町村訪問調査、②「PSWの視点」を示す図の作成、③「PSWの視点」チェックのための簡便なツールづくりに着手した。

市町村訪問調査については、障害者自立支援法の施行とともに、調査方法を精査したうえで今後につなげて行く必要があるであろう。

そして、当委員会の活動の大きな意義は「PSWの視点」を示す図を作成したことである。この視点の図をもとに、協会員向けの全国研修・地域研修その他に利用していただき、精神保健福祉士としての視点の確認を行えるようにしたい。また、病院外で働くPSWの業務指針の改訂の必要性を強く感じており、これらの図が役立つことができればありがたいと考えている。

その意味でも、中途まで作成してきた「PSWの視点確認ツールとしてのスケール」については今後も検討を重ね、より信頼性と妥当性の高いものとしていく必要があるであろう。

これらをふまえて、今後は以下のような方向で委員会活動を行っていく必要があると考えられる。

#### ①「PSWの視点スケール」の精査

より、使い勝手のよい、信頼性・妥当性の高いスケールとしていく。

#### ②障害者自立支援法をふまえて各市町村における取り組みの検討

調査そのものは調査を担当する委員会と連携しながら、障害者自立支援法の実施とその影響についてモニタリングしていく。

#### ③地域における業務指針の改訂

業務検討委員会と連携して、病院外で働くPSWの業務指針の改訂に取り組む。

また、協会本部には、当委員会で作成した「PSWの視点」を示す図について、他の委員会と連携しながら、有機的・効果的に活用する方法を検討していただきたい、と考えている。

以上、「地域精神保健福祉委員会」は、途中「精神保健福祉委員会」と改称し、5年間の精力的な活動に一区切りつけることとなる。これらの活動をふまえ、次期の委員会活動にさらなる活躍を期待して報告を終わることとする。

また、今後の活動のかたちであるが、精神保健福祉委員会は、名称からいっても取り組むべき課題が幅広く、できれば委員会の内部に、たとえば「視点スケールの精査」を行う小委員会など課題ごとに小委員会（もしくはプロジェクトチーム）を設けて委員会活動を行っていったほうが活動しやすいのではないかと考える。

(文責・進藤 義夫)

### ★精神保健福祉委員会

[委員名(在任期間, 2005年度3月現在の所属)]

委員長: 進藤義夫(2001-2005年度, NPO 障害者支援情報センター)

委員: 相川章子(2001-2005年度, 聖学院大学) / 秋山聡美(2003-2005年度, 東京都) / 大場義貴(2002-2005年度, 中部学院大学) / 北本未魅(2001-2005年度, 小規模通所授産施設荒川ひまわり) / 広江 仁(2001-2005年度, 就労支援センター MEW) / 三木良子(2001-2005年度, 就労支援センター MEW) / 山川久子(2002-2005年度, 入間市健康福祉センター) / 山田 創(2002-2005年度, 地域生活支援センターサンスマイル) / 渡部裕一(2002-2005年度, 原クリニック) / 和田朋子(2001-2005年度, 東京都) / 岩上洋一(2002年度, 地域生活支援センターふれんだむ) / 早川留美(2001-2002年度, 精神保健相談室こらそん) / 高村美鈴(2002-2003年度, やどかりの里大宮中部生活支援センター) [非構成員] / 太古由美子(2002-2004年度, 船橋市保健所) / 木村真理子(2003-2004年度, 日本女子大学)

[委員会開催日]

<2001 [平成13] 年度>

第1回: 2001年10月29日(月)、出席5名  
第2回: 2001年12月8日(土)、出席5名  
第3回: 2002年2月8日(金)、出席5名  
臨時委員会: 2002年3月23日(土)、24日(日)、参加5名

<2002 [平成14] 年度>

第1回: 2002年4月27日(土)、出席9名  
第2回: 2002年6月29日(土)、出席12名  
第3回: 2002年8月31日(土)、出席10名  
第4回: 2002年10月26日(土)、出席9名  
第5回: 2002年12月22日(土)、出席8名  
第6回: 2003年2月11日(火・祝)、出席9名  
第7回: 2003年3月1日(土)、出席7名

<2003 [平成15] 年度>

第1回: 2003年4月27日(日)、出席11名  
第2回: 2003年6月29日(日)、出席7名  
第3回: 2003年8月10日(日)、出席12名  
第4回: 2003年10月26日(日)、出席8名  
第5回: 2003年12月21日(日)、出席10名  
第6回: 2004年2月1日(日)、出席7名  
第7回: 2004年3月7日(日)、出席4名

<2004 [平成16] 年度>

第1回: 2004年4月11日(土)、出席8名  
第2回: 2004年5月30日(土)、出席9名  
第3回: 2004年6月10日(木)、出席9名  
第4回: 2004年7月4日(土)、出席8名  
第5回: 2004年9月5日(土)、出席6名  
第6回: 2004年11月6日(土)、出席4名  
第7回: 2005年3月27日(日)、出席7名

<2005 [平成17] 年度>

第1回: 2005年4月23日(土)、出席5名  
第2回: 2005年5月15日(日)、出席8名  
第3回: 2005年7月3日(日)、出席7名  
第4回: 2005年9月3日(土)、出席5名  
第5回: 2005年10月30日(日)、出席5名  
第6回: 2006年1月29日(日)、出席5名  
第7回: 2006年2月12日(日)、出席5名  
第8回: 2006年3月26日(日)、出席7名